
夢源転送 ~ phansifr transfer ~ ファンシィフル トランスファー

愉式 瞬戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢源転送 (phansifer transfer) ファンシイフル トランスファー

【Nコード】

N6804W

【作者名】

愉式 瞬戯

【あらすじ】

今春から高校生活を送ろうとしている青野空雄は、公園で捨て猫を拾った。公園でたまたま登場した吉野奈美との出会いが空雄に変化を与える。

登場人物&用語

登場人物

メイン

青野 空雄（あおの そらお） 主人公、1 - 0
吉野 奈美（よしの なみ） ヒロイン、1 - 0

エリート

秀字 究作（ひでじ きゅうさく）

幼馴染

秋葉 直宅（あきば なおたく） ナオタ、1 - A
鳴浜 浅漓（なるはま あさり） アサリ
花園 百合（はなぞの ゆり） ユリ
本橋 頼道（ほんばし よりみち） ヨリ

夏芽 満甘（なつめ みかん） ミカン、1 - A B
蘭羽 瑠璃麗（らんう るりり） ルリリ、1 - A B

先生

志本 善創（しもと ぜんそう） 校長
矢取 請路（やとり しょうじ） 教頭
緒方 娛郎（おがた ごろう） 1 - 0の担任
真剣 鋭子（まつるぎ えいこ） 1 - Aの担任

猫

ポッチ 白猫
シャムル シャム猫

赤継さん（あかつぎさん） 1 - Aの生徒

城端くん（しろばたくん） 1 - Oの生徒

マホ マホちゃん、アイドル

その他

仁能さん（にのうさん） 音響監督、キャン督

用語

プリンセスエンジェリック 現在放送中の新感覚ツンてへっア

ニメ

施設

舞浦台学園高等部

S棟 スチューデント棟、生徒達の教室がある建物

E棟 エクストラ棟、準備室や特別教室のある建物

ザー

ザーツ

雨が降っている。

暗雲あんうんが空を覆おおい、昼とも夜とも分からない黄昏時たそがれときの街に。

降り頻しきる雨の中、少年は道の途中で立ち止まって物思いぶけに耽ふけっていた。

15歳という年齢でありながらしつかりしているが、どこか頼りなさが残る。大人と言うには、まだ早い顔付き。

直立した165センチぐらいの細身な身体。目にかかりそうなくらいに鬱塞うつそくと伸びた黒い髪から優しそうな顔が覗のぞいており、カーキのモッズコートモッズコートのチャックを首元の所だけ開け、青いジーパンに、履き古された白いスニーカーを履いて、紺色こんの傘を持ってている。

ポツポツ、ポツポツと雨粒が勢いよく傘を叩く。

僕は神様に見捨てられたのかもしれない

何もかもが当たり前にありふれていた毎日。

今思うと僕は幸せだった……幸せだったんだと思う。

スーッ 小さな沈黙を破って、吸い込んだ空気は胸の中を冷たくさせる。

ふう 吐き出した息は白くなって、まだ寒さが残る3月の雨の中に消えていった。

ニヤー

ニヤーツ

雨音あめおとと混ざって、どこからか聞こえてくる鳴き声。気になったので、耳に残った感覚を頼りに聞こえてきた方角へと進んだ。

こっちなあ

あっ！ 立ち止まって、公園の方に顔を向ける。

ニヤー

また鳴き声が聞こえてきた。さつきよりも近くに。

こっちか！

鳴き声を追って、夜の公園へと入っていく。

ピシッ ピシヤッ 水溜まりを避けながらも、点在する窪みに靴底が浸かり音を出す。屋根が有り、雨を凌げそうな所は目の前にある土管しかない。そうやって見当を付けた遊具へと近づいていく。側に着いて、丸く横になった円の中を横から覗いてみると、両手大のダンボールとその中に白猫が居た。

捨てネコかぁ

猫はこちらをつぶらな瞳で見つめている。

救えないよ

かわいそうだけど、自分の力ではどうすることもできない……、でも。

ごめん

後ろ髪を引つ張られる気持ちで公園を後にした。

一週間後に入学式を控えている僕は、引越しの準備に追われていた。それまで家を行ったり来たり繰り返した。

はぁぁあ 嘆きつつも、少年は帰り道にあるコンビニに寄った。

ブイーン 自動ドアが横にスライドすると間もなく、

「いらっしやいませ こんにちは」と店員さんの声がした。

早速、目的の商品を求めて、店内を探し回る。

え〜と、どこだぁ

普段、買う機会がないそれを求めて、あちらこちらに歩き回る。

あつた！

様々な商品を並べている店内でようやく目当ての物を見つけた。入り口のドアから数えて、一番手前の棚の最下部に段々になって据えられていた。

値段を記載しているシールには「猫缶260円」と打たれている。

意外と高い。これっておいしいんだらうかぁと気にはなったが、右手で銀色の缶を一つ掴み、飲料エリアで大きな樽が目立つイチゴ

オレを一本取ってからレジへと向かった。

レジの前には会計をしているお客が一人居たので、そのすぐ後ろに並んだ。

ありがとうございます 前のお客さんが会計を終えたようなので二〜三步前進して、告げた。

「すみません ピリピリチキン 一つ」

「はい かしまりました」

店員は即座に迅速な対応をする。

待っている間に、アイドルのツアー告知が記載しているポスターが貼られている壁の斜め横に掛けられている時計を見ると、短針はちょうど6時を指していた。

ピッ

ピッ

ピッ

そうしている内に店員は商品を袋に入れ、レジ打ちを終える。

「会計 490円です」

店員は淡々(たん)と述べる。

財布から小銭を取り出して、500円玉を手渡し、

「10円のお返しです」

店員からお釣りを受け取った。

「ありがとうございます」

レジ袋を持って、歩き出すと共に店員の挨拶が横から聞こえ、店の外へと直行する。

ブイーン 出口の自動ドアが横にスライドし、店内から出た。

入り口のすぐ横に置かれている傘立から自分の傘を引き抜いて、白いレジ袋を片手に先ほどの公園へと向かう。途中の通路で、車が勢いよく通り過ぎるのを見送りながらも、負けじと進んだ。

再び猫のいる公園に辿り着くと、今度は足元が濡れないように、慎重につま先立ちで土管へと歩み寄った。

まだいるかなあ

地面に横たわった大筒おおつつを覗くと、変わらず茶色のダンボール箱を確認できた。

ふう 緊張していた胸が窄すぼみ、一安心する。

良かった

袋から猫缶を取り出し、蓋ふたを開けて

「ほらっ」

寂しそうにしている猫に呼びかけながら、箱の中にそっと銀缶を置いた。

腰を落として、膝ひざにこたえる態勢で見守っているが、中々食べてくれない。

どうやら猫は落ち込んでいるみたいだ。

その気持ち分からもなくもない。僕は、何故か自分と猫が重なって見えた。

「こついつ時はそつとしてほしいんだよなあ」

気付けば、猫に語りかけていた。

帰るかあ

屈んだ体を伸ばし、傘を傾けると灰色の空が写っている。

雨止やむといいなあ

せめて、気の病むようなこの天気だけでもどうにかしてほしい。

「それじゃあ」

答えもしない相手に言葉を投げ掛けて、雨の公園を後にした。

「よーしっ 終わった」

翌日、高校への入学が迫りくる中、やっと長かった引越しの準備と部屋の後片付けを終えた。降り続いていた雨は朝には止み、昨日の天気とは嘘のように青々と晴れ渡った。夕刻の今は、西の方から空がオレンジ色に染まりつつある。

あれからどうなったんだろう

考えないようにはしていたが、公園に居た猫がずっと気がかりでならない。胸の中に空しさが通り、忘れ物をしたような気分。

行ってみようかなあ

ふと頭の中に思案が過ったが、決められずに心が揺らぐ。迷っている間にも日は沈んでいく。

行くのか、行かないのか、自問を何度か繰り返した後、やっと答えを絞り出した。

行こう

自分には何ができて訳でもないけど、せめて元気にしているのかだけでも確かめよう。

折っていた膝を伸ばし、素早く財布を取って僕は立ち上がった。

「あつ 空雄くん」

階段を下り、玄関に通じる廊下を歩いていると伯母さんと遭遇した。

「あつ」

「どこか行くの？」

急いでいるように見えたのか、伯母さんが訊ねてきた。

「少し出掛けて来ます」

僕は丁寧に答えて、

「そう 夕飯までには戻ってね」

伯母さんは優しく見送ってくれた。

「はい」

それは後退りしそうな背中を押してくれるようだった。
ガラガラ

玄関の戸を横に押し開いて、僕は速足で駅まで急いだ。

「ちょっと奈美ーっ、シャムルちゃんにご飯上げたの？」

台所で時間に追われるように今日も夕飯の支度をしながら、エプロンした母が娘に訊ねた。

「えーっ、まだだよ」

別室から返事が聞こえたので、

「それじゃあ、これお願いね」

母が、その方に用意した猫の夕飯を持っていくと、

「はい」

娘はこちらに出向いて来たので、快く渡した。

「んっ よろしくね」

「はいっ」

娘は陽気に受け取り、我が家の一員の猫シャムルを探し始めた。
足音が方々（ほうぼう）から聞こえ、娘は家の中のあるこちらを周っている。

「シャムル、シャムルーっ」ご主人が、呼びかけるも

「あれー？ いない」シャムルは出てこないようだ。

困ったような顔で再び台所に戻った娘は、母に相談してみた。

「ママ、シャムル居ないよー」

「それならいつもの場所じゃないの？」

「あゝ、あそこかあ」

「わかった、ちょっと行ってくる」

「そろそろお外暗くなるから早く帰ってきなさいね」

「ハイ はい」

娘は靴を履きながら、それらしく応答し、

「いつてきまーすっ」
元氣よく外に出た。

もうママ〜、いつまでも子供じゃないよ

奈美はシャムルの夕ご飯を持って、いつもの場所へと歩いて行った。

電車に揺られながら隣の駅へと移動している時、僕は車窓に写る風景をぼんやりと見つめていた。無事で居るよう思いを馳せて。

数分の時間が経過して、川を見渡す風景を通り過ぎると

『次は舞浦〜、舞浦でございます。お降りの際はお荷物を忘れぬようお気をつけください』

駅員のアナウンスと共に次の駅に着いたので、電車を降りるやいなや、足早に改札口を潜った。

改札口の外は、そろそろ通勤ラッシュの時間なのか、雑踏が慌ただしくなり始めていた。

僕は、昨日の記憶を頼りに猫の居た公園を探した。まず駅前の信号を渡り、雑居ビルが立ち並ぶ通りを過ぎて、一直線に住宅地がある周辺を目指した。だが、そこから……、そこからどうやって行くか迷ってしまった。

あれっ？

昨日とは景色が違っていたので、公園どころか今いる場所さえ見当が付かない。確か目印は細長い路地だった気がするが、何処も同じような幅に見える。

昼と夜の風景の変化を痛感しながら、ひたすら歩き回る。

しらみ潰しに足を動かし、苦勞の末なんとかそれらしき面影を捉え、件の公園と思しき場所へと辿り着いた。

入り口に立って、公園内を見ると奥にはやはり横たわった土管がある。歩み寄りながら、何て言う遊具なのか気になったが、今は猫の方が大事だ。

ニヤー！ ニヤー！ ニヤーツ？
えっ？

聞こえてくる音に耳を疑い、土管の前で足が止まる。

ニヤオー！ ニヤア！ ニヤーツ？

不審に思いながら恐る恐る土管の裏を覗くと、

ニヤーツ！

猫たちが喧嘩けんかを繰り広げていた。こちらの気配に気付くことなく争い合っている。

おい

一匹に正対して三匹の猫が扇状せんじょうに向き合っている。それを遠巻きにもう一匹の猫が見つめている。

どうやら一対三とかなり分が悪ぶそうだ。

ニヤー！

あっ！

両者の間に張りつめていた糸が切れ、猫たちが盛大にぶつかり出した。

とうとう始まったみたいだ。

助けなくちゃ

たっ たっ たっ！

「ふんっ！」

身を乗り出そうとしたその瞬間に、正義のヒロインが少年の頭上から現れた。

すたっ

「参上」

三段跳びを見事成功させ、華麗かれいに地に降り立った少女が決めゼリフを吐はいた。

ヒロインの登場に目もくれずに猫たちは構わずに揉もみ合っている。横目に対象を一瞥いちべつした後、少女は乱闘中の猫たちを見据すえて、ずばっと言い放った。

「静まれーい？」

瞬時、ピタツ！と団子になっている猫たちの動きが止まった。音は真つ直ぐに届き、貫通したようだ。

声に圧おさされ、遅ればせながら猫山はのそりと崩れていく。それを茫然ぼうぜんと見ている少年は固かたまったまま動けないでいる。なんと少女の一喝いっかつによつて場は一瞬にして鎮静ちんせいしたのだ。

「よしっ」

目の前の様子を見て、少女は満足げ気な顔をして微笑む。そして何気なしに視線を猫達から今や動かぬまま遊具の一つと化している少年に移す。

「きみーっ！」

少女は何の躊躇ためらもなく明るく声を掛けた。

「っ」

少年は呼び起され、我を取り戻した。視界がぼやけているが、声のした方にゆつくりと顔を向ける。

ピントが整い、露あになつたのは一人の女の子。光に照らされて茶色ちっぽく見える黒髪を一つに結ゆつてあつて、両頬ほほの辺りには細く髪が垂れている。くすんだ白のパーカーの胸元は僅かに膨らんでいて、薄ピンクの短いスカートからグレーのスパッツが膝の少し下辺りまで伸びている。地面を踏んでいるのは、側面に橙色だいたいの線が何本も入つた白のスニーカー。いかにも走るのが好きっぽい感じだ。

少女は近くに寄つて来て、

「ありがとう」と言い

視線を逸そらして、

「……と言つておこつ」小さく呟つぶいた。

んっ!?

少年は驚きつばなしだった。お礼を言いたいのはこちらの方なのに、相手から先に来られたし、猫達を止めようとしたのも助けてくれたのだから。

少年はすぐさま改めた。

「こちらこそありがとう、けんか止めてくれて」

「当たり前だよ」

少女は、声を張って言い、

「平和が一番なのさあ」

へっへーん、と鼻を鳴らした、

「ねえ、シャムルーっ」

遠巻きで可愛らしくお座りをしている猫に。

少女が言葉を飛ばす中、三匹の猫は状況を察知し、散らばっていた。残されたのは傷を負った白猫。力が出ないみたいなのか、その場で立ち上がれず地面に伏せている。僕はその猫に見覚えがあった。昨日、土管の中で見た猫に違いない。

怪我が心配になったので、猫の近くに寄ろうとしたら、少女も付いてきた。

猫の前で膝を曲げて屈むと、少女もそれに倣い、猫の横で腰を落とした。そして、可愛らしくお座りをしていた猫ちゃんも寄ってきた。

僕と少女と猫ちゃん、じつとつ伏せになっている猫に心配の眼差しを送る。

……、ピクリ。

微妙な沈黙を破って、猫は身体を動かした。皆の願いが通じたのか、伏せ猫は反応してくれたみたいだ。

大丈夫……なのか？

必死に起き上がろうとした猫はしかし、中々立ち上がれずにいる。どうやら相当のダメージがあったようだ。

どうしよう

こういう場合はどうしたらいいのだろうか、動物を飼ったことのない自分には分からない。

僕は考え込むようにして目を閉じた。

ん〜ん 眉間に皺をよせるが、一向に良い案が浮かばない。

悩みながら、苦し紛れに、ふと横にいる少女の方に目をやったが

……、

居ない！

僕が目を瞑^{つぶ}っていた僅^{わず}かの間に、忽然^{こっぜん}と姿を消してしまった。よくよく見れば、さらに猫ちゃんまで居なくなっている。

(さっき見たのは何だったんだあ……)

そう困惑していると、後ろからすたすたと足音が近づいてきた。

「ほらっ」

視界の端から優しい声と共に少女が再度登場した。

やっぱり夢じゃなかった

少女の右手にはプラスチックの平たい皿が握られている。

なんだ！？

不思議がる僕を横に、それをゆっくりと伏せ猫の鼻先に置いた。

すると、伏せ猫は鼻をクンクンさせて匂いを嗅ぎ、忽^{たちま}ち起き上がってお皿に飛びついた。

おーっ？

すごい。さっきまで動かなかった猫が一瞬にして甦^{よみがえ}った。すごい勢いで器の中の煮干しやご飯^{ごはん}を食^くっている。

この劇的な変わり様^{よう}を見て、少女は初めから分かっていたかのように言った。

「やっぱりね お腹が空^すいてたんだよ」

続いて、少女は隣に寄り添う猫ちゃんに手を遣^やった。

「シヤムルちゃん ごめんねえ お家に帰ってから食べようね」

頭を撫^なでられて嬉しそうな猫ちゃんは、自分の夕ご飯を食べられたのを快^{こころ}く受け入れたようだ。

「あの すっ すいません」

はっと思立った僕は気づけば、何故か謝^{あやま}っていた。

「昨日 ご飯あげただけど その後どうしていいか分からなくて上^{うわめ}目から見える少女はちよつと不思議そうな顔をして、こちらを見ている。」

「どうしても 心配だったんだ」

胸から溢れ出す言葉を僕は止められなかった。

少女は、必死に訴える僕を見守っている。

「でも自分ではどうすることもできなくて……」

何を言っているんだ！？ 僕は

不意に悲しくなってきた。

立て続けに言い放った後、僕は黙り込んで、猫飯を食べて元気を取り戻した白猫に焦点を向けていた。

「そっかあ、それじゃあ君がご主人様だね」

えっ？

出し抜けに、少女が言ったことに戸惑った。

思わず、僕は少女に視線を移し、聞き返した。

「僕が？」

「えっ？」

少女は、まさかといったような表情で驚いたが、気を取り直して確認するように答えた。

「そっだよ」

そっかあ 僕がかあ

昨日、偶然見かけた時から薄々と感付いてはいたが、やはりそんなのかあ。嬉しいような、困ったような気分だ。

その気になった僕は、素直に心の中の不安を打ち明けることにした。

「でも 猫飼ったことないん」

「大丈夫だよ」

少女はこちらが言い終わる前に僕の胸の中の小さな悩みを明るく吹き飛ばした。

！

僕の頭の中を一陣の風が駆け抜けた。

衝撃が全身に伝わる前に、少女は早速次の行動に取り掛かった。

「じゃあ とりあえず この子はうちで預かるから」

白猫の方に両手を差出し、

「傷の手当てもしなくちゃいけないし」

そう言って、白猫を両手で掴み、

「んっ」

軽く力みながら、持ち上げ、胸の所で労わるように抱き抱えた。

白猫は暴れることもなく心地よさそうに少女の腕に身を任している。

歩き出す少女に連れて寄り添っていた猫ちゃんは大人しく少女の隣に付いていく。

「またね」

横合いに少女は、僕に挨拶をした。

「また？」

そして僕は再び聞き返した。疑問に思うことが本当に多い。

迷うこととなく、少女は当然の如く問いかける。

「飼いたいんでしょう？」

「……うん」

簡単なやり取りが終わると、少女が帰り様に踏み出した一歩が止まり、思い出したように訊ねた。

「あっ そうだ 名前なんて言うの？」

「青野 空雄」

僕は疑うこともなく、自分の名前を告げた。

すると、少女からすぐに返ってきた。

「私は吉野奈美」

「それじゃあ」

続けて言う少女に、

「じゃあ」

僕は応えて、帰っていく横姿を見送った。

ほんやりと見つめる先、少女の背中は徐々に遠ざかっていき、公園の出口で角を曲がって行った。

吉野さんかあ

辺りは何もかも赤色に染まっていた。僕の心を映し出すように。

明くる日、案の定ではないが、公園に行くとき昨日の女の子がいた。吉野さんは公園の隅に備え付けてあるベンチに座っていた。入り口で公園内を覗いた時は見つけれなかったが、中に入ったらすぐに発見できた。

ベンチにはほっそりとした吉野さんとその横に少し大きめのダンボールが置いてある。ちよつと疲れたような体相をしているのは気のせいだろうか、昨日の爽快な印象とは違い、疲れているように見える。

視線を向けた先、吉野さんと目が合ったかと思うとのろのろとベンチから立ち上がった。

「こんにちは」

今度は僕から声を掛けた。

「こんにちは！」

元気の無い声が返ってくると思ったが、やはり明るい声色だった。昨日の白猫はどこ行ったのだろうと軽く左右を見たが見当たらない。

「あの後どうなったの？」

吉野さんが帰ってからずっと気になっていたので訊ねてみた。

「あれから大変だったんだよ！」

吉野さんは嘆くように訴えかけてきた。

「傷が痛むらしくて 中々じつとしてくれなかったの」

言い終わった後、吉野さんはぷーっと頬を膨らませた。可愛さと面白さがマッチしていて絶妙な表情だった。

「それで その箱は？」

僕は、ダンボールの方を見ながら訊いてみた。

「これはねえ〜」

言い始め、吉野さんは深い溜めを作って、

「何でしょう?」

唐突に僕に質問を投げ掛けた。

吉野さんはちよつと壊れたみたいだ。昨晩は余程大變だつたんだろつ。

「ダンボール」

僕は同情しながらも真面目に答えた。何しろ原因を作つたのは僕だから。

「正解?」

吉野さんは威勢よく答え、

「そう これはダンボール そして中には」

ダンボールの上蓋の手を遣り、

「じゃん?」

大っぴらに開放して、一言、言い放つた。

「猫用具一式?」

「猫用具!」

勢いがあつたのでびっくりした僕はそのまま聞き返した。

吉野さんと僕がいきなり大きな声を出したせいから、ベンチの後ろから白猫が顔を出した。

「ここよ ポツチ」

白猫の動きを敏感に察知したのか、吉野さんは透かさず、猫を呼び掛けた。

ポツチ?

(つて、何だろう??)

「ポツチつて?」

僕は、白猫を両手で抱き上げた吉野さんに疑問を投げ掛けた。

「ポツチは この猫くんの名前だよ」

白猫を抱き抱えた吉野さんは気さくに答えてくれた。

「どうして?」

名前なんてどうして分かるのだろうか

不思議に思つたので尋ねてみた。

うん、と思い返すように頷いてから、吉野さんは快く話してくれた。

「首輪に記してあったんだよ」

「首輪？」

あの時見当たらなかったのになあ

僕は一昨日のことを振り返りながら、吉野さんが言うのを聞いた。

「そう 暇だからこの子と遊んでたら見つけたんだ 首輪」

吉野さんが土管の方を見るのに合わせて、

「んっ」

僕も上半身を捻って対応し、

「その土管の中にあつたダンボールの中に入つてて 猫缶も一緒

に入つてたよ」

吉野さんの説明が終わると、僕は身体を正面に戻して、

「そうかあ」

深く納得した。

一呼吸置いてから溜息と共に吉野さんはゆっくりとベンチに腰を落とした。昨夜ポツチに散々(ざん)振り回されたんだろう。さっきまで元気に振る舞っていたが、今は怠そうにしている。

程なくして、吉野さんはおもむろに口を開き、

「POTCH。これってポツチで合ってるんだよね？」

意味深な横文字を並べた。

POTCH?

(つて、何だーっ???)

英語、得意じゃないんだよなあ 確か小さい頃にそんなぬい

ぐるみがあったような気がするが…… きつとそれで良いんだろう

なあ 吉野さんが言っているのなら間違いないだろう

「合っていると思うよ」

僕は適当に同調したが、やっぱり心配になったので、

「……多分」と小さく後から付け足した。

「だよな」

予想外に吉野さんは気に掛けなかつたみたいで、変わらずポッチの白い身体を撫でてゐる。ポッチは吉野さんの膝の上で気持ち良さそうに寛いでゐるようだ。

吉野さんは眠たそうにうとうとしながら、気怠そうに話し出した。

「よし、説明しますかあ」

（ん〜、何をだ〜？）

そう言つて、ダンボール箱から猫の絵が載っているビニール製の袋を取り出し、

「まず ご飯は1日2〜3回 朝と昼と夜に」

次にプラスチックの四角い箱を持ち上げ、

「んで〜、猫砂は小まめに変えて」

二つをダンボールに戻した後、細長い容器を掴み上げ、

「シャンプーでたまに洗つて」

どれも自分に確認するように並べて、

「よし 何かあつたら病院に行くんだよ」

納得がいったのか、すくと立ち上がり、

「はい それじゃあ」

ポッチを僕に手渡し、吉野さんは早々と立ち去つて行つた。

……………。

腕の中には白い猫、ポッチ。吉野さんの行方が気掛りなのか、公園の入り口の方を見ている。

僕は咄嗟の事ではらく動けなかつたが、程なくして我に返った後、何気なしにベンチにあるダンボールを抱え上げ、悟つた。

これから一緒かあ

その日からポッチとの暮らしが始まつた。

黄昏市舞浦町。^{たそがれまごいっぴやう}ここは横浜の沿岸部に位置する港町。北側には山が並び、南側には海が広がっている。うみねこが鳴く長閑な街^{のどか}には、駅に商店街にショッピングモールだつてある。そんな自然と都会が両立し、充実した街で新しい芽がまた開こうとしていた。

四月七日、月曜日、舞浦台学園高等部にて、第一回入学式^とが執り行われる。

桜舞い散る丘の上、悠然^{ゆうぜん}と聳^{そび}える学校。今日から新しい生活が始まる。今年新設したばかりの校舎は真新しくて全体的に白く輝いている。

緩やかな坂を上り出すとちらほらと同じ制服を着た生徒達が見えてきた。

ツインテールの女の子が、隣にいる友達と仲良く話している。青の襟^{えり}を水色のスカーフで結んだ白地^{しろじ}のセーラー服と、下は黄色と白の斜めチェックが入った紺色のスカートから、白いハイソックスとブラウンのローファーが覗^{のぞ}いている。と、ツインテールの人が反対側に居た男の子に絡んでいった。

楽しそうに話す横姿が見える。

白のワイシャツとアイボリーのジャケットに青のネクタイをして、下は、紺色のズボンに斜めに白と黄色のチェック模様をしている。靴は、横に黒のマークが入った普通の白い運動シューズを履いている。

登校初日ということもあって、やや動きがぎこちなく見えるのは気のせいじゃないだろう。

そう言う僕も何故^{なぜ}だか、初々しい気持ちになっている。不安と緊

張と期待が入り混じっていて何とも言えない心地だ。

春の風が素敵な出逢いを運んでくれることを心に秘めつつ、制服を着た少年少女達は坂の頂上に足を運んでいく。

坂の頂上に至ると、校門の表札に“舞浦台学園高等部”と彫られてるのが目に入った。その辺りで数名が記念写真を撮ったり、そのまま素通りしている後ろ姿を見受けられた。

僕は記念写真を撮ろうと思っていただけ、一人だったので仕方なく玄関口に向かった。運動場を越え、真っ直ぐ入り口へと進み、矢印に従って廊下を突き進む。突き当りの所で渡り廊下を抜けて、体育館に入ると、パイプ椅子が行列していた。戸口の近くに待ち構えていた鋭い雰囲気を持った女の人にてきぱきと誘導され、最前列の席に座った。

目の前には、藍色の幕に金色で「舞浦」という文字を三角の枠で囲った校章が見える。

椅子に腰かけていると続々と周囲は、人で埋め尽くされ、整然と立ったところで間もなく、スピーカーの呼びかけと共に入学式が始まった。

ツーンと頭の中を突き通すような高音が聞こえた後に、「それではこれより入学式を始めます。教職員は所定の位置にお戻りください」

アナウンスが流れて、体育館内はいよいよという雰囲気満たされた。

館内が厳かな静けさに包まれている中、ブーンと幕が上がっていく。

現れたのは、校章が記された演説台と真面目そうな男の人。幕が全て上がると、その人は固く締められていた口を開いた。

「皆様、ご入学おめでとございます。教頭の矢取 請路です。え、早速ながら恐縮でございますが、本校は本年より開校されました新設校のため国家斉唱並びに来賓各位の祝辞を割愛させていただきます」

「気まずそうに告げ終わった教頭先生は、自分の役目を果たした安堵感に包まれ、肩の荷が少し下りたみたいに見えた。

「それでは志本 善創 校長よりご挨拶を賜ります」

「そう言つて、真面目そうな中年の教頭先生は舞台の袖へと退いていった。

代わつて登場したのは、さっきの先生より少し年上つぱいおじさん。

スピーチ台に着き、こちらに礼をしてから、肅々（しゅくしゅく）と話し始める。

「新入生の皆様、本日は我が舞浦台学園に御入学おめでとうでございます。校長の志本 善創でございます」

「洪い顔と声から、今まで生きてきた人生の分厚さみたいなものを感じ取れた。

「本日はこのような素晴らしい日を迎えられ、誠に嬉しく思います。皆様の門出を祝つかのように颯爽とした天気にも恵まれ、非常におめでたい限りで御座います」

生徒達は、静かに校長先生に注目している。

「そんなおめでたい皆様に私より伝えたい想いがございます」

その言葉を聞き、生徒一同が期待と少しばかりの不安を胸に抱いたような顔をした。

「生徒の皆様には、まだ自分でも気づいていないような秘めたる力があります」

校長先生は、力を入れ熱く語る。

「今日より新しいスタートを踏み出した生徒の皆様には、その才能を一心に伸ばし、存分に発揮して頂きたいと、そう思っている所存でございます」

校長先生が言い切った後、場内は胸を打たれた人で溢れていた。

生徒達は校長の熱意を胸に留め、噛みしめる。

「以上で、入学の挨拶とさして頂きます」

「そう言つて、檀上を後にした校長を、舞台の袖に消えるまで、生

徒達は食い入るように目で追った。

そして、校長先生の熱弁に応えるべく、アナウンスが流される。「続きまして、新入生宣誓」

その放送を合図に、眼鏡を掛けた頭の良さそうな生徒が左の方から出てきて、壇上に乗った。

一礼を済ました後、賢そうな生徒は手元の式辞用紙を読み上げる。「初めに、熱い激励して下さいました校長先生、ありがとうございます。この青々（ああああ）とした春の空に包まれた今日という日に僕達を厚く迎えて頂き心より感謝しております。このような晴れ舞台を用意して下さいました先生方には重ねてお礼を申し上げます。」

そこで一度言葉を切り、本題に入った。

「まだ僕達は何も知りません。学業に関しても、交友に関しても、そして社会に対しても、そんな未熟な我々ですが、精一杯勉学に励み、一生懸命の努力をし、青春を謳歌していきたいと思えます」

一息置き、そして引き締まった声で告げる。

「ここで新入生代表として諄諄たる意を誓います」

秀字 究作

格好よくスピーチを終えると新入生代表の秀字君が壇上の隅にある階段を下りる。

秀字君が左の方の席に着くと間もなく、閉会の知らせが告げられた。

「これにて 第1回舞浦台学園高等部の入学式を閉会します」

これを聞いて、生徒達から肩の荷が下り、凝り固まった空気が一度解けた。

「各自、教員の誘導に従って教室にお戻りください」

続いて流れたアナウンスに促されて、生徒達は体育館を退出し、そろそろと教室へと移動した。

教室に着いた僕は、戸口の上にある白いプレートに注目した。

いちのゼロ？

予想していたのとは違って、ちょっと引っかかった。

各生徒が教室の席に座り終えた頃、ガラガラと教室の戸が開き、すらりと長身な男の先生が入ってきた。

教壇に立ち、その人は自分の名前を口頭で述べた。

「皆さん初めまして、今日からこのクラスに担任となった緒方 二郎です。よろしくお願ひします」

「まだみんな初めてだから 緊張してるかなあ」

僕らのぎこちない雰囲気を感じたのか、先生は改めて黒板に自分の名前を書いた。

「緒方 二郎と読みます」

二回目の挨拶を済ました後、ほのかに行き詰った先生は困った様な顔をしてから、次に進んだ。

「うーんと、それじゃあ、いきなりだけど自己紹介いってみようかあ」

先生が場を和ませようと砕けた口調で話を換え、唐突に僕に番が回ってきた。

「はい、一番右端っこの君から」

やっぱりかあ

苗字が“あ”から始まる僕は案の定、一番初めに当てられた。

一握りの緊張はあるが、僕は席を立ち、やや後ろを向きつつ自己紹介を始めた。

「青野 空雄です よろしくお願ひします」

開始早々まだ何も分かってないので、名前だけという短文で済ませた。

そしてすぐに、先生から間延びした感じで突っ込みを受けた。

「青野くんかあ 何か他にないの？ 好きな教科とか趣味とか好きなアニメとか？」

アニメっ?!

「アニメですか？」

不審な点があったので、間髪入れずにほぼ反射的に聞き返したが、
「あーっ、ごめんごめん、それじゃあ次に行きますかあ」

先生は適当に言い繕って、

「つーぎーはー」

名簿に振り仮名を書き記し、後ろの席の人に順番を移した。

そうやって、総勢40人のクラスメイトに同じような緩さで巡り巡った。

キーンコーンカーンコーン

そこでチャイムが鳴ったので、先生はゆったりと考え、明るく席の真ん中辺りの生徒に振った。

「じゃ、とりあえず、ん〜、元気一杯吉野さん号令よろしくーっ」

吉野さん！？

「はい」

僕がすごく聞き覚えがある名前だと驚いていたら、快活にあっさり締めの挨拶は行われた。

「起立、気を付け、礼」

ありがとうございました〜

クラスメイト達は、ばらけながらも教室の前や後ろに足を運ばせる。

ちょうど先陣が戸口に近付いたところ、先生は思い出したように、遅れながら言い足した。

「あっ、みんな明日健康診断あるから〜」

こうして、昼前に初日の学校は終わった。

「ん〜ん、締切り〜っ」

自室のパソコンを起動させながら独りごちる。

春休みもライトノベルを執筆していた彼、秋葉 直宅という高校生は或る野望を果たすために猛然と勤しんでいた。

制服から私服に着替え、ジーパンと地味な柄の長Tというオシャレに無頓着な恰好をして、パソコンチェアに座っている。

「マホちゃん」

パソコンが立ち上がり、ディスプレイに映し出されたピンク色のコスプレをした少女に心酔し、心の中の声が思わず口から漏れ出た（締め切りまで時間がない〜っ 奇跡よ 起こってくれ〜）
神にも縋るように胸中で願いを乞う。

よし

小説のページを開き、キーボードの上に両手を構え、準備が完了した。

待っててくれ〜っ、マホちゃ

ピンポーン

誰だ〜っ？

ちょうど執筆に取り掛かろうとした時、不意に鳴ったチャイムにより出端をくじかれてしまった。

ピンポーン

ん〜？

締切りが迫り、切羽詰まっているというのに一体誰なのか、見当が付かなくはないが……。

椅子から立ち上がり、カーテンを少しだけ傾けて隙間から覗くと、
「ちよつと〜、ナオターっ」

アサリかあ

幼馴染が居た。

「いるのわかってんのよ！ 出て来なさい！」

まったくうるさいなあ

外から響く声に急ぎ立てられ、ナオタは仕様がなく表に出ることにした。

玄関の扉を開けると、

「もうアサリーっ、やめときなよ〜」

門扉の向こうから声が聞こえてきた。

「あっ、やっと出て来たわね」

見れば、幼馴染のアサリとユリちゃんが塀の外に立っていた。堂々と言い張るアサリの横をユリちゃんは遠慮がちに見守っている。見慣れたいつもの風景だ。

「遅いのよ」続けて話し掛けるアサリを

「ちよつと。アサリーッ」ユリちゃんが柔らかに制止する。

新学期早々、変わらぬ日常が続いている。

この二人とは旧知の仲で、アサリとは幼稚園の時から、ユリちゃんとは小学生の時からずっと一緒だ。アサリは何かにつけて突っかかってくるし、ユリちゃんは控えめで大人しい。それは身形にも顕著に表れている。ツインテールの薄い茶髪で、白い生地にも黒い細かな斑点がある短いスカートと膝下までのダークブラウンのブーツを履き、タイトな薄い青のデニムジャケットを着ているアサリ。一方胸元まで伸びている黒のロングヘアで、前側にフリフリの付いた白のしとやかなカーディガンとベージュのズボンを身に付け、明るいブラウンの踝位までのブーツを履きこなすユリちゃん。正反対の二人がどうして仲がいいのかわからないが、これはこれでうまく均衡が保てているのだろう。

しみじみと浸っていると、アサリが何やら話を持ち出してきた。

「ヨリがまた面白いの見つけたんだって」

「おう」

ナオタは思わず胸が躍ってしまった。

ヨリは楽しいことを見つけたのの天才だ。いつも何かしら楽しま

せてくれる。

「じゃあ 行くかあ」

即座に決断したナオタは、大急ぎで稼働中だったパソコンの電源を切って、白と黒のモトーンのフランネルシャツを大急ぎで着て、玄関に向かった所を、

「ナオター、急げーっ」

アサリに催促されながら、側面に黒の七芒星のマークの付いた白いスニーカーを履き、玄関を出る。

ナオタは、アサリとユリちゃんと共にヨリの家へと出発した。

ナオタのフォーカスした視界で、水色のゴムで括られた二本の尻尾がピョンピョンと躍っている。

ポニーテール 振り振りしやがって

「あっ、何よ？」

首を巡らし、こちらに食って掛かるツインテール、アサリ。

なんで分かるんだ！？

心の中を読まれて混乱しているナオタ。それを横目で見守るユリ。幼馴染達は仲が良いのか悪いのか分からないが、住宅街の中をひた進む。

途中で退屈凌ぎに、

「あんた、また、家で何やってたのよ！？」

アサリがナオタの日常を詮索し始めた。

「何もしてねえーよ」

(ちよつと小説書いてただけだっつーの)

ナオタは面倒くさそうな態度を取り、自分の生態を隠そうとした。

「うそねっ」

しかしアサリは軽くあしらって、見事言い当ててみる。

「どうせまたアイドルだとかなんだかに釘付けなんでしょ」

「そんなことねえよ」

ナオタは語調がゆらゆらとしながらも、必死ではれないように努めた。

左端にいるユリは二人の会話をじっと聞いていた。特にナオタの話を。

中央を歩くアサリはナオタの抵抗を無視し、さらに攻め入った。

「そんな二次元だとか三次元の美少女のどこがいいの？全然分らないわ」

「……」

ナオタは暫しひるんだが、

「だから違つて言っているだろう？」

必死に防御策に講じる が！

「じゃあ 証拠見せてみなさいよ！」

アサリはさらにその上から覆い被せる。

「はあ」

困った様子でナオタが声を上ずらせ、反抗の態度を見せる。

「なんでそんなことしなくちゃいけないんだよ？」

(支離滅裂だつっの)

しかし、アサリは逆手を取って、冷静にナオタの裏を突いた。

「ふっ、凶星ね」

何 つつ？

(畏かあ、俺を出し抜くための畏かあ、姑息なあ、アサリーっ！)
「やっぱりね」

アサリは最後の追込みにかかった。

(ん、状況は劣勢かもしれない、だが引き下がるつもりはない？
心が折れそうだったナオタは奮起し、

「そういえば、知っているぞ、アサリは今ダイエットを試み
反撃を試み
ズバシッ？

イテッ！

ナオタがアサリのダイエット計画を露呈しようとした瞬間、アサ

りのミドルキックが襲ってきた。

「っ、なっ、何すんだよ!? いきなり?」

ナオタは声を裏返し驚き、痛がる。

「あんたが悪いのよ? か弱い乙女の心を傷つけて」

アサリが都合のいい言い訳をしたが、

「どっ、どこが弱いんだよ! ずしんと来たぞーっ、ずしんと、

こりゃ本当に必要だなあ、ダイエツ」

そんなことお構いなしにナオタは文句を付ける。

んのっ

今度も黙っておられず、アサリはナオタの背中に飛びつき、

いでててっ!

後ろから頬つぺたを左右に強く引つ張って、これ以上余計な事を
言わぬように懲らしめる。

ナオタはアサリのお肉が背中に当たり、

(何か当たってんぞーっ)

変な感覚を覚えながら、振り切ろうとした。

「ばっ、ばめる」

しかし、アサリは我を忘れた振りをして、知らん振りを決める。

「えーっ、何のことか聞こえないわーっ」

横で繰り広げられる騒ぎに、さすがに見兼ねたユリは、

「ちよ、ちよ、ちよっど、二人ともーっ」

慌てて止めに入る が、

ほらっ、びろーん

いてててっ!

ハハハッ

ばめ、ばめごっけ

……、収まる気配がなさそうだ。

もう 二人だけで楽しんでーっ

ユリは、二人が言い合う光景を見ながら羨ましそうに頬を膨らま
した その時、

「おいおい 熱いなあ 新学期早々(そうそう)」

唐突(とうとつ)に後ろから声が聞こえてきた。

「あゝっ」

動きを止め、ナオタとアサリは同時に聞き覚えのある声がした方に振り向いた。

「仲睦(むつ)ましいですなあ」

軽く茶化(ちやか)してくるのは件の少年(くだん)、本橋頼道(ほんばしよりみち)。

緑のカーゴパンツとベージュの長袖シャツというラフな格好をして、こちらに歩み寄ってくる。その手にはコンビニのレジ袋(さ)が提げられている。ふわりと耳が覆われた

思わぬ遭遇(そうぐう)に際(さい)し、ナオタは俄(にわ)かに嬉(に)しそうに、アサリは心なしかがっかりして、ユリはあまり変わらず、幼馴染(ともだち)の愛称(なまえ)を呼んだ。

「ヨリーっ」

よいちよ

よいちよつ

急な坂道をちよつとずつ上つて行く。

頭には麦わら帽を被り、額との間からはみ出ている栗色の髪は、眉の所ではちり平行に切り揃えられ、横側は顎辺りでクリつと内側にカールしているショートボブ。そのため、円らかな印象がある。胴には足まで繋がっている濃紺のオーバーオール。その下からくすんだ水色ワークシャツが伸びている。足元はこげ茶色の長靴よりもタン（スネの部分）が少し短いブーツ。その中にズボンの裾を入れ履いている小さな女の子。

身長が140センチぐらいの小柄な小女は、オレンジが積み込まれた大きな籠を担いで運んでいた。

ショートボブの髪が汗ばみ、額にペタリと付いているのを気にせず、健気な顔をしている。

（あと少しでつう）

疲れているのか、覚束ない足取りで進んでいく。坂の頂上までもう目と鼻の先まで達した時、

わ　足元が揺らつき

わつ　体勢が崩れ始め

わーっ　バランスが取れなくなり

の仰げ反って、籠を傾かせてしまった。

オレンジ達は籠から投げ出され、地面に落ちて、ごろごろと坂道を転がり出す。

あーっ？　待つてくだつあーい？

小女は籠を垂直に戻しながら、肩越しにオレンジ達に無言で叫びを送るのだが、無常にもその声は届かなかった。

オレンジ達は坂道を下るに連れて、どんどんスピードが上がり、

少女との距離は開いていくばかり。

なんとか籠を足元に置き、急いで追おうとしたが、すでに手遅れの様子で、小女は肩を落として涙目になった。

しかし、それでもぐつと堪えて、走り出そうとした時、滲んだ景色の中に佇む一人の影が浮かんだ。

その人のお腹辺りには、オレンジ色の物が見える。

一度瞬きをして視界をクリアにすると、両腕には確かにオレンジ達を抱えられている。

えっ？

疑ってしまった。瞬時に脳内で、散らばったオレンジを逃さず拾い集める方法を模索するが、どう考えても自分の思い浮かべる動作では不可能だというのに、一体どうやって……。

どっ、どうやって？ なのですか

すこしの間立ち止まっていたが、すぐにその硬直を解いて、小女は坂の中間辺りにいるその人の方へと駆け寄った。

近くに行く度に明らかになっていく容貌。一見すると人形のようにも見間違える程の奥ゆかしい姿。薄ピンクの着物のようなジャケットと薄緑の長ズボン。靴は忍者が履くような白い足袋を履いている。

「しゅ、しゅみましえーん」

断りを入れながら、その人の前で足を止めてお礼をする。

「あの、オレンジちゃんをこぼしてしまっちえ、なので、わたし、おいかげようとしたんですけじよ。ほんとなんてお礼をしたら、いいのきや」

感情が高ぶっている小女は、途中で言い淀みそうになるものの、必死に言葉をまとめようとした。

そして、ヒー、ヒーと肩で息をしながら、相手から返事を待った。待ったのだが、しかしその人は黙ったままである。

小女は不思議に思い、軽く顔を窺ってみたが、機嫌を損ねているって訳じゃなさそうだ。むしろ落ち着いていて自分の言葉が届いて

いたのかどうか、心配になるくらいに。

ここで何かを言うには失礼と思った小女は、もう少し待とうとした、その時だった。

「大丈夫、気にしないで」

小さく優しい声が耳に入ってきた。

さらにその人は小女の方に近づき、坂の頂上に目をやって、

「あそこの籠かごのところまで持っていくね」

親切に運ぼうとした。

その人は、思いつきり走った反動でぼんやりとしていた小女を氣遣い、どうやら息が整うのを待っていてくれたみたいだ。

ふつと意識が明瞭めいりょうに舞い戻った小女は透かさず、感激の言葉を発した。

「いつ、いえそんなあ、わるいでつよ」

相手はあまり変わった様子もなく、

「そう」

こくりと頷うなずき、さらに言い掛けた。

「でも一人じゃ重いと思うから」

小女は申し訳なさそうに困りながら、相手の親切を断ろうとした。「ひつ、拾って頂いた上にそこまでして頂けるなんて、もつ、申し

訳ないでつよ」

小女から拒こはまれたその人は、しかし依然として姿勢を崩さず、讓じやう歩ほして応じる。

「それなら半分持ちます」

遠慮していた小女も、流石さすがにここまで言っただけだと首を縦に振るしかなかった。

「それじゃあ、お言葉に甘えまつね」

そう言っただけ、少女は相手からオレンジを半分受け取り、横に並んで坂を上のぼり出した。

先程は籠かごを担いでいたので気付かなかったが、オレンジを両手に抱えたまま進むのは意外と歩きにくい。

坂を上り切るまで少し時間が掛かりそうだったので、

「あのー、ひとつ訊いてもいいですか？」

小女は疑問に思っていた事を尋ねてみた。

相手が微かに「はい」と頷き、こちらを窺ったところに小女は話し始める。

「そのー、どうやってオレンジちゃん達を全部拾えたのでつか？ わたしじゃどうやっても取り逃してしまいそうなので」

質問を受けた相手は、しかし無言を保ったまま歩き続けている。

その様子を見た小女は、いつ聞こえてきてもいいように耳を傾けて、相手に注意を向けた。

少しの間、その人は何かをためらっているみたいに考えていたようだが、踏ん切りがついたのか、眉をぴくりとさせ、

「これは」

口を開きかけた途端、

「っ！」

気を取られて、小女が足をつまずかせ、よろりとした。

このままでは、また同じドジを踏んでしまう。小女の胸裏は霞みかけたが、しかし、間もなく小女の背中にそっと肩がくっつく感触があった。

瞬時に危ういと察知したその人は、機転を効かせて素早く小女の背中に身体を寄せて、どうにかオレンジを零さずに済んだ。

「ははっ、また助けられまちなね」

体勢が戻り、気恥ずかしく微笑む小女は思った。さっき頑なに運ぶと言っていたのは、きっとこの事を予測していたからだろうと。

自分の不甲斐なさにしよぼんとなった小女は、ちよっとの間立ち止まってしまったが、胸の中に溜まった嫌な想いを断ちきるように大きく呼吸をして、気を取り直し、その人と二人で再び坂の上を目指した。

それからは、何か話した方がいいような、黙っておいた方がいいような当たり障りのない微妙な雰囲気の中で逡巡している内に、二

人はとうとう坂の頂上まで着いてしまった。

その人は、軽く小女に目配せをして窺^{うかが}ってから、地面に置いてある籠^{かご}の中にオレンジを丁寧に入れていく。

その横姿を見ながら、小女は思い切つて、その人を誘つてみることにした。

「あのーっ、もしよかったら家^{うち}に来ましえんか？」

一瞬、その人はピクッと止まってから、また何事もなかったようにオレンジを籠^{かご}に移^{うつ}す。

すぐに返事が来なかったので、少女はオレンジ移しに専念^{せんねん}し続ける相手にもう一度訊^きいてみることにした。

「あのー」

言いかけた時、その人は小声でぼっそりと答えた。

「そこまでお邪魔する訳にはいきませんから」

その言葉にめげそうになった小女は、しかしここは退^ひく訳にはいけないと決心し、頑^{かたく}なに巻き返しを図^{はか}った。

「えーっと、すぐそこなのでっ」。

その効果が現れたのか、相手はちよっぴり嬉しそうに、はにかんだ。

「私^{わたし}など居^いてもつまらないだけでしょっ」

その表情を見て、あと一押しでっ、と小女は心の中で思う。

そして、休むことなく最後の追い込みに入る。

「そんなことないでっよ、私たち二度も助けられました、それに……」

それに、まだ聞いてないんでっよ

「はい」

その人は少女の勢いに押されて、小さく返事をした。

小女は相手の思考が傾いていることを実感しながら、巧妙^{めいひょう}に畳^{たた}み掛ける。

「まだちゃんとお礼もしてませんち、本当にどうやって」

どうやってオレンジちゃん達を拾ったのかを

「わかりました」

小女は言い終わる前に、了承が得られ、

「えっ」

ちよつと驚いた風な口をして、再度確認してみた。

「おっけーなのでつか？」

間もなく、こくり、とその人の首が縦に振られた。

僕（青野空雄）は寮に帰り、この間拾ってきた猫・ポッチのことで悩んでいた。

そなえつ 備付けの勉強机に付いている木の自然な色合いをした椅子に座り、ポッチに目をやって、

（うーん どうしよう）

ごろごろと床で転がるポッチを見ながら、思わず独り言。

ポッチを拾ってから一週間が過ぎた。吉野さんから貰った猫用品だいぶんも大分減ってきたので、まだ先になるが、いつか補給しなくちゃいけない。一体どのくらいの値段かは分からないが、どうやら猫というのは、多少お金がかかるみたいだ。

バイトしなくちやなあ

僕は、せつせと働く未来像を漠然と頭に浮かべたのだが、何となくしっくりこない。

（そりゃ、そうかあ）

当たり前の話だけど、まだ15歳だから働いたことはない。

当然、街で買い物する時にレジや接客をしている人やスーツを着たサラリーマンなどは、よく見かける。しかし、どんな仕事をしてるかまでは想像だけじゃ追いつけないみたいだ。

それでもポッチのために頑張ろうと思う。

あまり器用な方でもない僕には、単純な作業を繰り返す簡単な仕事とかが似合っていると自覚している。だから取り敢えず、誰でもできそうな現実味のある仕事をしよう。

ポッチは床に伏せて、おだ穏やかに目を瞑っている。

平和だなあ

有意義に過ごすポッチに和みながらも、方向性を決めた僕は適当な仕事がないか探しに、ぼんやりと外に出ることにした。

椅子から立ち上がり、玄関に向かう際に、

「いってきまゝす」

小声でぼつりとポツチに挨拶してから、駅の方に行ってみることにした。

ヨリの家に着いたナオタ、アサリ、ユリは、ヨリの部屋でポテトチヨップスを頬張^{ほおば}っていた。

机の上には雑誌やら、携帯ゲーム機やおしぼりなどが程よく散らかっている。

「それ、新しく発売したんだぜえーい」

ヨリは乗り良く紹介し、さっきコンビニで買ってきたばかりの品^{しな}物を友人に振る舞う。

「まあ、味わつてくれえー」

ヨリが言う前に早速、手を伸ばしている友人達は、黙々と味わっている。

油で揚げられた乱切りのポテトに薄く塩^{まぐ}が塗^ましてあり、至^{いた}ってシンブルな味。

早々と食べ終わると、ナオタは楕^だ円形の低いテーブルの上にある携帯ゲーム機を掴み、一声入れる。

「ヨリ、借りるぞーっ」

「おう」

ヨリは快く返事し、パソコンの電源を入れた。

ヨリが起動したパソコンを操作している所に、

「これ、最新号？」

アサリは言い掛け、雑誌の発売日を確認して、表紙に桜と可愛らしい服を着た女の人^{おんな}が載^のっている本^{ほん}を手に取り、読み始めた。ユリはそれを横から見ている。

ベットに腰を掛け、二人はとても楽しそうに読んでいて、平和的だ。

しかし、ナオタは戦っていた。

床に座り、大人しくゲームをしているように見えたナオタは、奮^{ふん}闘^{とう}していた。

チラチラッ

ナオタの目には見えているのは、魔法服を着た少女とメイド服を着た少女。技を繰り出す度にスカートがヒラリと舞い、見えそうで見えない際どいラインを作り出している。

水色かつ……

ナオタの胸裏にほつりと囁かれた一言。それは、画面の向こうの少女達にはではなく、画面のさらに上から見える少女へのもだった。画面に集中すればするほど気になって仕方がない。リアルチラチラ、むしるピラピラ。

ちょうどナオタの目線から絶妙な角度で、見え隠れするピラピラ。そんなものを正面に向けられたナオタは、居ても立っても居られず、とうとう思っていた事を正直に口にしてしまった。

「パンツ見えてるぞー、アサリ」

一瞬固まる室内の空気。真夏から真冬になったような凍結だった。その凍てついた氷を破つて、アサリが応じる。

「うるさいわねー、見してるのよ」

んっ！

一同、騒然。空気の層がぐつと上がる。

それに伴い、ポチャッ、と湯呑のお茶が大きく揺れた。

ヨリの母は、軽く天井を見上げる。それは一階に居たヨリの母にも感知できるほどの変化だった。

ナオタは、下から押し上げるような圧力の中、躊躇いながらアサリに言う。

「パツ、パンツは見せるもんじゃないだろう」

これに、ヨリは恥ずかしくなり目を伏せた。

「いいじゃない、これくらい」

そんなことお構いなしにアサリが言い放った。ナオタが言い出したことにより、何故か收拾のつかない空気になってしまった室内。

そこに今まで、静かにパソコンを操作していたヨリが口を開く。

「これ見てくれよ」

あ〜ん、と間延びした声を漏らしながら、一同は一斉にパソコンの画面に目を遣った。

パソコンの画面が遠くて見づらかったのでナオタとアサリとユリは、ヨリを取り囲むようにパソコンの前へと集まった。

ヨリが提示した画面には、短いアルファベットの文字が並べてある。

「アイ・エス・シー・エス？」

それを見て、誰とも言わず、ユリが声に出した。

その投げ掛けに、ヨリは待つてましたと言わんばかりに答える。

「そう、ISCS。昨日偶然見つけたんだ」

ふ〜ん、とつまらなそうな感じでアサリが鼻を鳴らす。

「でっ、何なんだ？これ〜」

ナオタは、気になったのでその先を促した。

おう、と快く受け、ヨリは話し始める。

「いやあ、まだ謎なことばかりなんだけどさあ。どうやらこれは仮想空間で遊ぶものらしいなあ」

へえ〜、とユリが興味深そうに反応した。

「仮想空間……って何？」

機械的な事がさっぱりなアサリが疑問を口にした。

「それはね、現実を基もとに作られたもう一つの世界だよ」

その問いに答えたのは、意外にもユリだった。

「そうなんだ〜」

理解できたのかは分からないが、アサリからゆるりとした返事があつた。

二人の話を聞き、ヨリは繋つなげて説明するように補足する。

「ただこれ遊ぶには条件があるみたいなんだ」

ナオタが、当たり前前のような顔をして質問を入れる。

「ん〜、条件？有料ってことか？」

「そうじゃないんだ」

言いつらそうにしているヨリ。

ヨリが黙ってしまい、パソコンのファンの音が微かに聞こえる程に静かになってしまった。

じりじりとヨリに注目が集まる。

「もう、勿体ぶらないで言わないさいよう」

痺れを切らしたアサリが揺さぶりをかけ、

「ちよつと、そんなに急かしたら駄目だよ」

ヨリが止めようとする。

ナオタは、どっち付かずな状態。

「もうしょうがねえなあ」

半ばあきらめたヨリがマウスを動かし、

カチツ カチツ

ディスプレイに新しいページを開いた。

画面中央に現れた横長の赤い枠に囲まれたグレーのダイアログボックス。

その中に記載されている文字に4人の目が行く。

causion

don't tell anybody if you don

t want to lose your existence .

画面を見たまま固まっている4人。

ナオタがもごもごとした口調で画面の英文を読む。

「どんと、てる、えにいぼでい、ゆあー、えぎすてんせ？」

読み方の誤りに気付いた学問優秀なヨリが、即座に柔らかく教える。

「違うよ、直宅くん、ドント、テル、エニィバディー、イフ、ユ

ー、ドン、ウオントウ、ユア、エグジスタンスだよ」

そつ、そつ読むのかあ

ヨリの博識に感心するナオタ。

そのやりとりを横で聞いていたアサリが呆れた様子でナオタに文句を入れる。

「このくらいできて当たり前でしょ 本当中学校で何勉強してたのよ」

うるさいなあ、アサリー、僕だってちゃんと勉強してたさあ
心の中で言い訳をするナオタを、アサリは追い詰める。

「どうせ、ゲームばかりしてたんでしょ」

「ちっ、違」

対抗しようと言い淀むナオタ。
しかし。

わないかつ

言われた通りゲームばかりしていたナオタは、それ以上何も言え
なかつた。

ちゃんと勉強しておけば、アサリに文句を言われずに済んだのに、
と少し後悔するナオタは、ほんの僅かわずの間、瞳を閉じて反省した。

……………と思ったら、急に画面が真っ白になった。

というか、見えるものが白一色になってしまった。

呆然ぼうぜんとする意識の中で、ナオタの現存時間が止まる。

それは道の奥にあった。

小柄の小女と親切な少女は、坂の上から横道に曲がった。やや狭い通路の両側を石垣の塀が並んでいる古風な通り。入り組んだ道を少し進むと、小女は足を止めた。

家の方に身体を向け、小女は説明する。

「着きました ここですよ」

案内された少女の目には、二階建ての和風な家屋が写っている。塀に埋められた表札には、「夏芽」と彫られている。

両脇に小女の身長を優に超える高い塀の間を抜け、二人は玄関へと足を進める。

がらがら

横開きの戸をスライドさせ、屋内へと入ると、石畳のタイルが敷いてある玄関に足を踏み入れた。

小女は謙虚な姿勢で少女を招き入れ、

「どつ、どうぞつ、上がって下つあい」

扉を閉め終えると、ぱさつ、と松の絵が描かれた暖簾を滑り、

「あらつ、おかえり満甘」

玄関付近の物音を聞き付け、母が出向いて来て、やんわりと声をかけた。

小女・満甘は振り返り、明るく応える。

「あつ、ただいま」

満甘がそのまま大きくなったみたいに見える母は、少女に視線を向け、娘に何気なく訊く。

「満甘、お友達？」

少女は母と目が合い、軽く会釈をした。

「そつ、そうですよ」

弱冠慌てたような素振りで話す満甘をあまり気にすることもなく、

母はすんなりと受け入れた。

そして遅ればせながら、少女の腕に抱かれているオレンジに気付
き、娘をひたと見つめる。

「手伝ってもらったの？ 満甘」

満甘は身体をちょこつと揺らし、少し取り乱しながら必死に言い
繕う。

「そつ、そつ、そうなんでつよ。たまたま手伝ってくれたんでつ、
はい」

(そつ)

母は何となく訝しく思いながらも、少女を放つたらかしにする訳
にはいかないので、少女に優しく言いかける。

「悪いわねえ、それじゃあお茶でも飲んでいってね」

そして娘に目配せをして、奥へと戻っていった。

合図を受け取った満甘は早速、籠を石畳に下ろし、気恥ずかしく
なりながら少女に頼む。

「え〜と、オレンジちゃん達をここに入れてください」

少女はこくりと頷き、すつと手早くオレンジを籠に移した。

満甘はその俊敏な動きに一瞬見入って感心し、そつと言いつ促す。

「中に入りましょう」

そつして二人は靴を脱ぎ、家の中に入って行く。

松の暖簾をくぐって、フロアリングの廊下を真っ直ぐ進み、角を
曲がると突き当たりには、家屋の外郭をなぞる様に趣のある庭が面
していた。

歩いていく中、少女の目に自然と写り込む景色。石で囲われた小
池にししおどしが御辞儀をして、隣には石灯籠が据えられている。
そこから庭先へと飛び石が繋がっている。ブラウンのつつかけが縁
側に隠れると、ちょうど小池の前の部屋に栗毛のショートボブが入
って行く。

上半分に和紙が張られた障子を過ぎると、四角の卓袱台が目に入った。陽光を反射し白い光沢が浮かぶ濃茶の漆塗り造り。足元に広がる八枚の畳は奥ゆかしい和の雰囲気醸し出している。

入り口を右手に置いて、深緑の落ち着いた色合いの座布団に向い合せに腰を下すと、純朴な小顔の後ろに、白雲が棚引く山景が窺えた。

と、その襖が横に動いたと思うと、先程の母が朱のお盆に湯呑みを載せて入室してきた。にこりと少女に微笑みつつ、さっと湯呑みを卓袱台に置いて、すぐに退出していった。

襖が静かに閉まると、無言の時間が滑り込んできた。

肅然と息をする少女を目の前にし、これはいけないと思った満甘はお茶を勧める。

「どっ、どっどっ」

焦ったりすると、口調が少々変化する満甘の言葉をすんなりと受け止めた少女は、小声で、

「はい」と頷いて、湯呑みに手を伸ばす。

両手で包み込むように持たれた湯呑みを傾け、少女はお茶を啜る。整然と行儀良く露を嗜む少女に、満甘は話しかける。

「さつきは本当に助かりました」

少女は小さく首肯してから、視線を満甘に向けてじっと見つめる。相對する二人の横姿の奥にある床の間に滝の流れる掛け軸が目立つ。

満甘は、少女とまだ出会って間もないので親しい仲とは言えず、話をどう進めたらいいのか分からないが、とにかく言い出してみる。

「そのさつき玄関で色々と言ってしまったんでつけどう気にしないでくださいね」

「えっ」

少女はそんなこと気にかけていないみたい、小さく反応した。身体に力が入っている満甘は、勢いに任せて畳み掛ける。

「っというか、まだ名乗ってなかったでつね。えと、私は夏芽 満

甘かんでつ。蜜柑みかんは蜜柑でもあの蜜柑ではなくて、でも同じ読みの満甘
なんでつ。本当そのままなんでつけどね」

はははっ、と一人で冗談っぽく笑ってみせる満甘に少女は輪郭りんかくだ
け残した声で答える。

「うん、私は蘭羽らんう 瑠璃麗るりり」

へっ？ と、耳に残った響きを拾う中、語頭ごごを聞き逃した満甘みかんは
きよとんとした顔になる。

そしてちゃんと確かめるべく、あやふやな感じで訊たずねた。

「ルリリちゃん？」

いきなり名前で呼ばれて、なんとなく気恥しく固まるルリリはゆ
っくりと返事をする。

「……はい」

頷うなづくルリリを見受けた満甘みかんはむふふ、と笑みを浮かべ、嬉しそう
に話した。

「そうでつかあ わたしはミカンって呼んで下さい。みんなからそ
う呼ばれていまつから」

「ミカン、ちゃん」

いきなり下の名前を呼び捨てるのに気が引けたルリリは、控え
めに口にした。

呼ばれて嬉しいミカンは勢いに乗り、つぶらな笑みを浮かべて言
う。

「よろしくでつ」

「うん」

迫ってくるミカンの勢いに押されながらもルリリは、快く受け入
れた。

朗らかになった和室に、ポンっとししおどしの心地よい音が届く。
親切少女ルリリと仲良くなったと思ったミカンは、この期うきに乗じ
て一番気になったアレを訊きくことにした。

「それでなのでつが」

薄く開いた瞼まぶたから、辺りの景色が見える。

「(っ、あれ?)」

真下に写る地面がどこまでも遠くに伸びている。

うっ、うーん、と呻うめき声を上げながら、意識を自分に戻すと、滑らかなコンクリートの感覚が胸に当たっているのに気づく。

透すかさず視線を落とすと、不思議なくらい真っ白な地面だった。牛乳みたいに濃厚な色をしている。自分の置かれている状況はよく分からないが、うっ伏せの状態から手を地面について、起き上がってみる。その時、一瞬ちらつと金属質の物体が写ったが気にしない。すぐと立ち上がると、何故かガシャ、と機械的な音がしたが、きつと空耳か何かだろうと思いい気に留とめなかった。

とりあえず今は現状を把握したい。だから、自分を取り巻く360度の景色を見渡してみた。

右手を額かみに翳かざして、白々(しらじら)しい空間、まるで白い宇宙みたいな虚空こくうを見やる。

(んっ?)

すぐに何かが写った。視界の上部に薄黄色の雲が浮かんでいる。

「おーっ」

自分の成果に感嘆し、軽くガッツポーズをした。

途端。

? あれ?

今までであった薄雲うすくもが姿を消した。

どうなってるんだ?

そう思い、突き出していた握り拳に目が行った。赤い腕輪の角々(かどかど)しいフォルム。硬質な機械と彫刻を足したような腕。関節部分には継ぎ目のようなラインが見える。

(これは)

さらに、下方に視線を向けて確かめると、腕と同じように硬質でありながら生身のような生命感のあるボディが写し出された。

(ロボット!なのかなぁ?)

お手上げの体勢で行き詰まって停止する。

そうしていると、じわりと目の前の虚空に黒い文字が浮かび上がった。

set your code

?

横並びのアルファベットの首を傾げる彫刻体。

.....

突出している文字達を前にしたまま時間が無常に過ぎる。

30秒たった頃、急に文字が赤く変色し点滅し出した。

ブーン、ブーン、と甲高い警告音が響き渡る。

! やばいんじゃないか??これ?

突然の異変に気付いた彫刻体は、右往左往して慌てふためく。

そんな中、時間が経過するに連れて点滅の光が強くなり、警戒音が大きくなっていく。

「うおーっ?どうすりゃーいいんだーっ?」

及ばされ、頭を抱えて走り回る彫刻体は混乱する思考の中で必死に叫んだ。

「っしっ、しんあいーっ?」

言い終わったかと思うと、ピタリと音が鳴り止んだ。

はあ、はあ、と肩で息をする彫刻体。

その目線の先に青光りする光源が並列している。

you joined in ISCS now you are a member of Delatase.

アルファベットが得意ではない彫刻体は、その文字をただ立ち尽くしてぼーっと眺めていた。

外に行ってみたが、良いものがなかった。寮に戻ろうとしていた僕は掲示板が目がとまった。学校から徒歩五分の近場に敷設されている学生寮。モスグリーンの格子型の門を開き、コンクリートの屋根が付いた玄関まで真っ直ぐ伸びるねずみ色のアスファルトの脇に立っているアルミの掲示板。

深緑のでこぼこの盤上^{ばんじょう}に張られた白い紙がある。入学式、つまり登校初日にして掲示する事項があるなんて驚いたが、とにかく目を通してみる。

㊦

人員募集

この度、我々は新たな対抗力の設立を果たした。並みならぬ苦勞の末、類まれな幸運に恵まれ、実を結んだことを感謝したい。

現在、世界は滅亡の危機に迫っている。信じがたいことだが、これは紛れもない事実である。我々は絶命に瀕した苦境から一刻も早く脱出するべく、微力ながら救済の手を施したい。これは、安寧な未来を望む者なら当然な義務であると共に最重要優先事項であると考えるべきものを守るため、我々は戦うことを誓う。そして、普く平和的な日常を守りたいと思う。

この意志に賛同する者は以下の期日に結集されたし。

記

日時 四月八日 午後四時
場所 D棟 一階 第四準備室

Delta

se

『

デルタセ？

最後の英文字はこう読んでいいんだろつかぁ、と思案しながら小首を傾げる。

そして、もう一度詳細を確かめるために文書に目をやる。注目したのは下部にある日時欄。

第四準備室？

校舎にそんな部屋があるのだろうか気になったが、日にちには四月八日と記載されている。

っ、ということは、

(明日かぁ)

今日、駅前の本屋さんで初めて求人誌というやつを見たのだが、どうも手続きには時間がかかるみたいだった。一応、無料で配布されている薄めの冊子きょうしを持って帰ってきた訳なのだが、この募集が一番早いみたいだ。

手っ取り早く済ませるには、持って来いの条件。

そう思い、強化ガラス製の両開きの扉が開け放たれた玄関に足を向ける。

行ってみるかぁ

・・・wait for next convention

霞んだ視界の隅に青く輝く横列がうつすらと写る中、全景が暗転した。

気付けば、顔面に当たる柔らかな感触が伝わってくる。何よりも心地良いふわふわなベッドのような感覚に、いつまでもこのままでいたいと思う。あまりにも居心地が良かったので、自分が触れているものの正体を確かめたくなった。

ゆっくりと瞳を開けると、間近に白い布地が見えた。その様相からやはりこれはベッドだと改めて思い、顔を上げてみたら、すごく見覚えのある人と目が合った。

視線が交わる中、一瞬硬直して、後から全身が総毛立った。

「ナー・オー・ター、」

低く唸るアサリに、ナオタはぎよっと口を開ける。

そして、アサリは怒る。

「あんた何やってんのよ!」

「うわーっつ」

後ろに跳び下がり、ローテーブルにぶつかったナオタは、わなわなと身体を震わせている。

そこに透かさず、アサリは言いつけようとした。

「この変な うん?」

浴びせられる既に、息を呑んだ体勢のまま止まっているナオタは、自分が無事であったことに気付き、アサリの方を見してみる。

「ちよっと、やつ、やめて、よん?」

急に甘えたような声を出すアサリの胸に手の甲が覆い被さっている。身を擦じらせてくねくねするアサリの胸を押さえる両手が優しく動く。

立て続けに身を揺らし悶えたアサリは、堪えきれず言う。

「もうわかったーっ、ギブ、ギブーってばーっ、ハン？」

そして、両手の滑らかな動きが止まる共に、軟体生物アサリの悶絶タイムも終了した。

と、思うと、今度はその手達がアサリの身体にぎゅっと巻き付いた。

柔らかな温もりに包まれ、脱力状態から息を吹き返したアサリが親しげに嘆く。

「もう ユリーっ やめてってばーっ」

んふふ、とアサリのうなじに顔を近づけ、微笑するユリ。

今日も仲が良いアサリとユリは、密着したまま静かに呼吸をしている。

すると、じゃれつく二人の横合いから活気の良い声が入ってきた。

「いいね、いいね！ 天使たち 戯れたわむの一時をぜひこのカメラに

収めておきたいなあ！」

「いや〜、やめてよ〜」

アサリが普段見せることのない和んだ感じでヨリを制する。

続けて、ユリもふにゃふにゃな声で言う。

「そっだよ〜」

ヨリはそれでも最良のアングルを探し、巧みなセリフで褒めながら二人の周りを纏まとわりついている。

ヨ 何を言っているんだい、エンジェルズ、この美しさを撮らせずに人間が務まるものかあ

ア そんな口先だけで褒めたって、撮らしてあげないんだからね

ユ う〜ん

ヨ もう、このキューティーエンジェルがっー

ユ どうしようかなあ〜

ア ちょ、ちょっと、ユリ、駄目よーっ

ユ う〜ん

ヨ ぬしし、そっさあ、本当のことを言っているだけでスウィー
トエンジェル

見慣れた光景を前に、ほっとしたナオタは先程の感触の正体を知り、少し落胆する。

なんだ、アサリかあ

瞬間、気落ちしたナオタのへな顔に勢いよく飛んできた反論。

「なんだって何よ!？」

アサリの研ぎ澄まされた動物的感性は、ナオタの表情から瞬時に心境を察知したようだ。

ナオタはビックリしたのと同時に、心の中で深く嘆いた。

もう俺の思考を読むのはやめてくれ

「ごめんなさい、このことは言えないの」

「そつ、そうなんでつか」

「しょんぼりとする円つぶらなミカン。

その顔を見て、ルリリは申し訳なく視線を卓ちゃぶ袱ふ台に傾けた。

「きつ、気にしないでくだつあい」

ルリリの変化に気付いたミカンは両手をぶんぶんと振り、慌てて弁明する。

「その、わたちが悪いんです。きつ、聞いちゃいけないことだって、本当は薄々感じていたんでつけど、やっぱり気になって、だから、ごめんなつあい」

ミカンの謝罪の後に、数秒の沈黙が訪れた。その間、ルリリは何かを考えているように遠い瞳で寂然せきぜんとしていた。

思考の終着点まで思い及およんだルリリは無音で瞬きをし、静かに口を開いた。

「ただ……いえ、なんでもありません」

ミカンはびつくりしたような安心したような表情で聞き、ゆっくりと立ち上がる。

「それじゃ、いつまでも引き止めてるのは悪いですし、本当急に付き合っあって頂いてありがとうございます」

「……はい」

心細く応えたルリリは、どことなく残念そうな顔をして、先立つミカンの後に続いた。

玄関先で。

「え〜と、これ今日助けて貰ったお礼にどうぞ」

そう言っいって、ミカンは白いビニール袋を手渡す。底部には丸い橙

色の球体が二つ透けている。

「ありがとうございます」

ルリリは奥ゆかしく受け取り、

「それでは」

小さな声で挨拶をして、門の外へと歩き出した。

遠ざかる背中が慕^{した}わしく感じたミカンは思わず、

「あの、またどこかで会えるといいですね」

つぶらな瞳で門を曲がるまで見送った。

夜。

ヨリの家から帰宅したナオタは、パソコンの画面を眺めている。画面には、ピンクのひらひら衣装を着飾ったアイドル・マホが映っている。

「どうなってんだろう？ マホたん」

ナオタは、すぐく親しそうな口調で画面の少女に話しかける。

「うん、今日さあ、変なことがあったんだあ」

画面から発声はされていないが、ナオタはまるでそこにアイドルのマホがいるみたいに会話している。

うん、うん、と小さく相槌を打つナオタは、すぐく真剣な顔で画面のマホたんを見つめて、聞き入っている。

「そうだよね、分かった」

仮想マホたんから、アドバイスを貰ったらしいナオタは、両手でハートマークを作って、

「プリンセス、マホ マホ」

言いながら、右、左と両腕を上げてVの字にして、首を軽く傾け、寸秒ポーズ。その後、

「はいおっけー」

満足げに腕を元の位置に戻した。

そして、ナオタはパソコンの電源を切って、

(さあ、録画してたの見よう)

いつものようにアニメを見始めた。

同じ頃、東京都内某スタジオにて。

大きめのスクリーンに向かって、声を出す少女が居た。

ラフな絵が動き、それに合わせてセリフを吹き込んでいく。

「ちょっと心配だったただけだから……」

「ばか、そんな態度じゃわからないんだからっ、てへっ」

今、行われているのは、現在放送中の新感覚少女バトルアニメ「プリンセス エンジエリック」の最新話分のアフレコ。従来同様の学園を舞台にしたバトル作品のだが、業界初の試みとして、新しいテイストのラブコメ要素を織り交ぜようとしている。

画面の映像が止まり、本日の収録分を録り終えたところで、

「はい、今日はここまでです、上がって下さい」

隣のコントロールルームから声がかかり、少女はブースを出た。

ミーティングルームを歩き、コントロールルームのガラス張りの防音扉の前で立ち止まり、慎んで待ち構える。

数秒後、おもむろに扉が開いた。

少女は透かさず、恭しく挨拶をする。

「監督　っ、ありがとうございます」

「ちーがーっ、きゃ・ん・と・く」

柔らかい口調で答えながら、出て来たのは音響監督の仁能（にのう）さん。ストライプの長袖シャツとジーンズを身に付けている。

仁能さんは、大袈裟な身振り手振りで抑揚よくようを付けながら言う。

「アイキャン、ユーキャン、ウィーキャン、キャン督、わかった？」

「っ、はい、キャン督、ありがとうございます」

納得した仁能監督ことキャン督は、気分良く話し始める。

「うん、今日も良かったよ、後ろから見てたらね、本当にマホたんそっくりだったよ、マホちゃん」

「っ、はい」

「もう最終回が楽しみでしょうがない！　今回もぴったり乗ってたから、次も楽しみにしてるよ」

「はい、ありがとうございます」

「っ、っ、てとところと、てへっって、ところのメリハリが付いていてとっても良いよ、初めてなのに、合わしてくるなんて本当マホちゃんは声優になってよかったと思うよ」

「はい、これからもがんばります」

「そうそう、これからは、ツンてへっの時代だからね」

「はい」

「とうかさあ、こんな夜遅くまでご苦労さんだよ」

ミーティングルームにある壁時計は、8時50分を指している。

「あれ、マネージャーさんはまだなの？」

ふと気づいたキャン督は訊いてみた。

マホちゃんは、ひよいと廊下の方を覗いて、

「ん〜と、もう来ると思います」

「そ〜お〜」

キャン督はさらっと訝しい顔をした後、ぱつと普段の顔に戻り、

「確かマホちゃんって、高校生だったよね？」

「はい、今日入学式があつたんです」

「おーっ、おめでとっ、じゃあ、今は青春の真っ只中だね」

「えっ、せいしゅんっ…、はい、青春です」

マホちゃんとキャン督が他愛もない会話をしていると、

「お疲れ様です、仁能監督」

マネージャーがやって来た。

キャン督はすぐさまに抗議する。

「もう遅いよ、マホちゃんはこれから活躍する貴重な人なんだから、待たせないでください」

「っ、はい、失礼しました」

マネージャーは素直に謝って、

「行きましようか」

「はい」

マホちゃんとその場を退出する。

「お疲れ様でした」

「は〜い、お疲れ様でした」

帰り際、マホちゃんはキャン督に謙虚に礼をして帰路についた。

後部座席、マネージャーが高速道路を走行する中、左右の車窓に次々と街灯の光が尾を引いて過ぎていく。

仕事終わりのマホちゃんは空腹と眠気が合わさり、うとうととしている。

二重の大きな瞳。ほっそりとしていて、なおかつ愛嬌のある顔形。その周りには肩にかかる黒髪セミロングが流れている。根っからの恥ずかしがりやな性格を除けば、最早完璧。完璧なアイドル。その美貌を人々から気づかれぬように、高校生に似つかわぬ変装をしている。

ベージュのトレンチコートに身を包んだまるで探偵のような恰好。

行きは、横浜から東京まで電車に乗ってきたため、なるべく風景に溶け込めるようにこのような姿になった。

マホちゃんは、眠たい目をくしゅつと瞬きしてからマネージャーに訊いた。

「明日は仕事あるんですか？」

「はい、今日に引き続き同現場でアフレコの仕事があります」

「わかりました」

「収録は午後からです。もしかすると早めに学校を抜け出す必要があるかもしれません」

運転中のマネージャーは、前方に注意を向けながらはつきりと話す。

「直接向かうと思いますので準備の方をお願いします」

「はい、明日もよろしくお願いします」

マホちゃんは眠気のため、口調がゆるりとなりながらも謙虚な姿勢で答えた。

前方に目をやったマホちゃんは、フロントガラス越しに信号が連なる市街地を見た。そこで、もうそろそろ家に近いことを知った。

赤信号で停車中、サイドウィンドウから高級感漂う服屋さんのシ

ヨーウィンドウを何気なく覗くと、もう閉店しているみたいなのか、照明が落とされて人形が数体ぼつりとポーズを決めていた。

マホちゃんは、自分の恰好がちょっと大人振っていないか気になっていた。

その人形達と照らし合わせようと思っていたが、薄暗くてはつきりと細部が確かめられなかった。

そうやってシヨーウィンドウを見つめていると、ゆっくりと横に動いて行って、やがて視界から外れていった。

マホちゃんは少し心惜しく思いながら、前方を向いた。

車は、夜の街から住宅街の方へと進んでいく。

「よし、よくやった、スナイプ」

手前にあるモニターを見て、低い声で嘆^{たん}ずる。

モニターには、” New Codes Accepted ” と表示されている。

ふっ、と一息を吐いて、グレーのデスクの上で組んでいた手を解く。

正面に映画館のスクリーン大の液晶板、前列に数々のモニターを備えたデスクを見渡せる艦艇の管制室のようなホール。

今、言葉を発した者はとりあえずの充足を得たみたいなのか、モニターの電源を切り、ゆっくりと席を立って退出した。

次の日。

学内には楽しそうに、またどこか気恥ずかしげに生徒達が登校してくる。桜の花びらが緩やかな春風を受けて、早朝の新鮮な白い空気の中をたゆたっている。

誰もが新生活に浮かれて足取りが軽く、希望に満ち溢れた気持ちで校舎に入って行く。

四月八日火曜日、舞浦台学園高等部で新入生を対象に健康診断が行われた。

朝のホームルーム中のA組。

しんと静まり返って、時計の針がチクタクと聞こえる程の静けさ。少し開いた窓から春の柔らかい風が入ってくる。

高校生活2日目の高揚感に包まれているはずの1 A組の生徒達。なのだが、何故かその舞い上がる気持ちが抑えられている。

理由はこの人。

「今日は、午前に備品購入、午後からは健康診断をします」

教壇に立つ清廉な直線。全身から研ぎ澄まされた雰囲気を感じさせる目力が物凄い、まるで戦国時代の女武将のような人。

黒板には、昨日書かれた名前が残ったままでいる。

真剣鋭子（まつるぎ えいこ）。

真っ直ぐな眼差しで生徒達を見つめ、確固たる姿勢を保っている。右側の最前列に座るナオタは、朝一だし、まだ眠たいので途中で欠伸をした。

すると、倦怠な気配を素早く察知した真剣先生の鋭い眼光が、瞬時に飛んできた。思わず、蛇に睨まれた蛙のようにナオタは固まっ

て、ぴしつと背筋を垂直に伸ばした。

よろしい、と言わんばかりの表情で真剣先生はナオタの動向を確認して正面を向き、生徒に指示を飛ばす。

「まずは全員きっちり列に並んで、廊下に集合。男子一列、女子一列。それから、男子と女子は別々に分担された教室に行ってもらおう。くれぐれも列を乱さないように」

最後に意味深な一句が聞こえたが、ナオタはあまり気にせず聞き流した。

「なお、まだクラス役員を決めていないので、先頭は、」

真剣先生は、教壇に置かれたクラス名簿を見て、

「男子は秋葉、女子は赤継（あかつぎ）に先頭を行ってもらおう。全員、起立して廊下に直進！」

A組の生徒達は真剣先生の快活な声の後、続々と廊下に出ていった。

昨日、しょんぼりしたり、不思議なことを体験したりと色々あったミカンは、只今備品購入の真っ最中だった。

購買部の窓口だけでは到底大人数に対応できないので、まだ使用用途が定かになっていない教室に特設会場が設置された。

ミカンは長テーブルの上に置かれた名簿表に自分の名前を記載して、体操服と体育シューズの入ったビニール袋を受け取った。

胸に押し当てて、両腕で大切に抱えて、教室から出ようとする。

ぐねぐねと竜の身体みたいに壁沿いから廊下に伸びる列から離れ、別の出口から出て、廊下で待機する。ミカンは窓の外に写る中庭を眺めながら、今日も良い天気だなあ、なんて思いながら顔を綻ばす。そういえば昨日も今日と同じような天気だったなあ、と思い出しながら、ふと視線を廊下に戻す。

見えるのは列を成して並んでいるクラスメイト達。向こう側には、まだ備品を購入していない人達がいる。ミカンはその中の1人の姿に目をやった。なるべく相手に悟られないように配慮しながら、ちらちらと覗き見る。

今朝からずっと気になっていたこと。

朝、登校して自分のクラスに入ろうとした時、窓際が一番後ろの席に一人静かに座っているクラスメイトが目に入った。なんとなくその雰囲気に見覚えがあるような気がしたが、もうすぐチャイムが鳴るので、すぐに自席に着いた……、のだが。

やっぱり気になる。どうしても、こっ胸の中にちょこんと引っ掛かって、そのことばかり考えてしまう。

服装は、確かに制服と私服じゃ全然違うけど、あの無防備におつとりした横顔は、おそらく、きつと、多分間違いないだろう……、いや、もし違っていたら、勝手にこっちの思い込みで本当は、まだ会ったこともない人かもしれない。そう思って、声をかけるべきか

否かを、ずっと迷っていた。

そして、今も変わらずどっち付かず。

それでも、ミカンは心の中で決めていた。備品購入が終わって、昼休みになったらさりげなく話しかけてみよう。

そうすれば、もし自分が勝手に仮定している人でなくても、ごく自然な流れで打ち解けるはずだと答えを出していた。

ミカンは、来る昼休みに向け、くしゃりとビニール袋を強く抱きしめる。

高校に入って初めての友達作り。

決戦は、昼休み。ミカンはそのつぶらな瞳に力を入れ、意欲を高めていく。

ナオタを先頭にして1 A男子は、主に生徒達の教室が置かれるS棟（スチューデント棟）から、購買部や準備室などの特別教室があるE棟（エクストラ棟）に移動した。S棟とE棟はそれぞれ独立しているのので、二つの建物を移動する際には、当然その間にある渡り廊下を通る。人が横に三列程並べる程のそれほど大きくもない狭い渡り廊下。その上を1 A男子達が列を真つ直ぐに揃えて歩いていた。外から吹いてくる風が少し肌寒いような眠気をさすような生暖かい感触で頬を撫でる。驚くべき秩序とスピードで迅速に備品購入を遂行した1 Aの男子達は、早々に自分達のクラスに戻ろうとしていたところだった。

向こうの扉の方から、きゃははは、と笑い声が聞こえたと思うと、どっさり人波が出現した。楽しそうな笑い声と自由な歩みで一斉に押し寄せてくる。

セーラー服隊。

一瞬、そんな言葉がナオタの頭に過った。

どんどんと接近するかましい音。ナオタは鋭い目つきの先生に、先頭に行くように頼まれた。もし、しっかり先導できなければ、あの先生に何をされるか、と考えたら、急に背筋がぞくつとした。

誰なんだ、一体、秩序を乱す邪魔者は。そう思いながら、ナオタはうるさい集団に耐えつつ、クラスメイトを引き連れて出口を目指す。

入学して二日目、実際顔合わせするのは今日が初めてだろう。それなのになんなのだろう。この仲の良さは。どうやったら、自分はこう簡単に人に打ち解けていけるのか、とナオタは考えていた。

セーラー服隊の端先を越え、列の半ばくらいに差しかかった時、見覚えのある顔が写ったと共に、聞き覚えのある声が聞こえてきた。「ちよつと、ナオター」

ぎくつ、一体誰なんだ？　こんな所でその言い方をする奴は？
恥ずかしいからやめてくれと思いつながら、ナオトは音源に目を向けた。

白さ際立つ真つ新たなセーラー服を着た勝気な面と目が合った。

アサリかぁ

ナオタは不意に足を止めて、アサリを観察した。

なんでこんなところにアサリがいるんだ。なんて偶然だ、と思いつながら。

ナオタは、こんな人込みの中で声を交わすのは、気恥ずかしいがとにかく一声だけ返そうと思った。

「よっ」

軽く手を上げ、アサリの方に返事をしてみた。

しかし、何も返答が来なかった。セーラー服隊は何もなかったかのように、続々と横を通り過ぎる。

ナオタが停止中のためA組は立ち止まって、団子になりそうな状態。

咄嗟に、いけないと思い、ナオタはまた歩き始める。

セーラー隊と行き違う中ちらりとユリの姿が写ったが、今度はもう足を止めずに目配せだけしてS棟に戻っていた。

未だ購買部でもたついている10のメンツ。

僕は一番先になんなくビニール袋を受け取った。自分のサイズを確認して、もし心配なら試着して再考する。それで気に入ったら、名簿に名前を記入して、購買部の人から品物を貰う。それだけのはずなのに、何故時間がかかるのだろうか。

廊下で待ち続けること20分。

列の後半辺りは購買部の教室の中にいる。もう窓の外の景色にも飽きてきたので、教室の中の様子を窺ってみた。

開け放たれた扉の向こうには、何やらカウンター（長机で仕切った簡易的なスペース）で、茶縁の眼鏡をかけたクラスメイトがぐだぐだと喋っている。

ここからでは何を言っているか聞き取れないが、身振り手振りで係の人に必死に訴えかけている。

体操服を指さして、そのフォームについて熱く語っているように見える。そんなに変わったことはあつただろうか、と思いながら自分の体操服を見るが、どこにでもありそうな至って普通の体操服だと思う。熱弁を続ける彼は一体何が気に入らないんだろうか。

両手を外国人みたいに『もうお手上げさあ』と広げ、茶縁の眼鏡は諦めて備品を受け取っていった。

ビニール袋を片手に抱えて、出口に向かってくる。

僕はなんとなくその様子を目で追っていて、戸口付近で彼はこちらの視線に気付いたようだった。

軽く愛想笑いを浮かべて、こつちを一瞥したので、僕もそれとなく「おつ」と微笑んでみた。

茶縁眼鏡は後列へと並び終わると、たちまち購買部からは続々とクラスメイトが帰って来て、あつという間に全員が廊下に集結した。僕の前にいるショートヘアの長身、城端くんは後ろを見て、人

数を確認し、全員揃ったみたいなので片手を真っ直ぐ上げ「出発しまーす」と声をかけて歩き出した。

担任の緒方先生といい、さっきの茶縁の眼鏡といい、結構のんびりしているクラスなんだなあと城端くんの後を歩きながら思った。

「へえ、そうなんでつか、奇遇ですね」

嬉しそうに話しているのは、1年A B組のミカン。

ミカンの推測は当たっていた。

ミカンの予想通り、今朝見た窓際のクラスメイトは、昨日偶然オレンジを拾ってくれた親切な少女・蘭羽瑠璃麗だった。

昼休みに入り、そろそろと近づいて声をかけようとしたら、なんというか向こうは、もう始めから気付いていたみたいで、普通に「こんにちは」って挨拶をしてくれた。

ということ、昼休み仲良く二人で食事することになったミカンとルリリは、お互いの弁当を見せ合っている。ミカンは自分の席からいそいそと椅子を運んできて、ルリリの机の横にきっちりセツテイグした。

ミカンの弁当は、ハンバークにトマトとレタスなどの一般的なもの。ルリリのは、出し巻卵にキスのフライと星形の人参が添えられた和食。

「うわ、おいしそうですね」

ミカンが会話を始めた。

「…うん」

「そのテンプラとか人参さんとか、かつこいいですよ。わたしのは、どーんとハンバーク」

弁当を手で取ってルリリに見せ、

「こういう大胆なものも好きなんでつけど、やっぱり日本人は和食が一番でつね」

「…そう…かな。私はいつも和食がだから、洋食に憧れます。」

「へえ、そうなんでつか！」

意外や意外。ミカンはちょっと驚いた。そしてにやりと笑みを作り、

「じゃあ、交換しましょうかあ？」

なんて、言ってみる。

「うん、いいよ」

返事はあっさり返ってきて、ミカンはまたもびっくり。一瞬だけ目を見開いて、おどけてみせる。

「ふっ、ふっ、ふっ、ありがたや、ありがたや。ルリリちゃん」

何を言い始めたんだろうと、きよんとしているルリリを余所に、ミカンは自分のハンバーグをキスのフライの横に置いて、そのままキスのフライを持ち去り、自分の口に一直線。

もぐもぐと噛んで和の味を堪能する。

「おいちいですね。和の味覚を感じました」

にこにこ笑顔で報告するミカんに、ルリリも心なしか嬉しそうな様子で、ミカンに貰ったハンバーグを口に運ぶ。

上品に咀嚼して、静かに呑み込む。

「どうですか？ ミカンの家のハンバーグは？」

ミカンは目をキラキラさせて話してくる。

「おいしいです」

一言。無難に答えたルリリは、美味しかったみたいで、

「次はスパゲッティーというのも食べてみたいです」

さらに洋食に興味を抱く。

「スパゲッティーですか、わたしもあんまり食べたことないんですけど、大体赤と白の二色あるんですよ」

ルリリは黙って真剣にミカンの話を聞いている。

「わたしは赤い方が好きで、ミートスパゲッティーってやつが好きなんですよ」

へえ、そうなんだ、と顔に書いてあるみたいな表情のルリリの顔を目の当たりにし、ミカンは、思い切って勢い任せに言っちゃう。

「ルリリちゃんは、あっさりしているのが好きだったら、ホワイトなスパゲッティーでつね。もし良かったら今度一緒に食べに行きま

しょうかあ（笑）。ぐふふ、な〜んて」

笑ってごまかしながらルリリの顔を窺うと、満更でもない様子。「そうですね。私で良かったら食べにいきましょう」

「やったー！」

心の中で大歓喜するミカンは、込み上げてくる笑いを必死で堪えている。

ほんのついさっきまで、ここで自分はちゃんとやっているのか、高校生活をエンジョイできるのかなあ、なんて杞憂していたミカンは、今は、気分最高。快晴の青空。春、バンザイー。高校、バンザイー。人生、バンザイーの有頂天状態。

気を緩めると、つい大笑いしてしまいそう腹筋苦しい。

そんなミカンの後ろを通って、自席に向こうとしている小柄な少女。肩辺りまで伸びたセミロングの先端がうねうねとパーマが掛かっている。少し覚束ない足取りで歩き、ミカンの後ろを通り過ぎる。その気配がなんとなく気になったミカンはちらりと横を見て、自席に向かう後姿を窺った。

途端に。

ぱつと、一瞬顔が硬直して物凄い衝撃が走ったことをミカンは知った。

140センチとちょっと、という自分の身長とおそらく同じくらいだろう。そして、ひょこひょことした小刻みな足取り。それは、まさに同志。

買い物の時に小学生と間違えられたり、棚の上の方の物が届かなかったりと、きっと同じ悩みを抱えているであろう人物。

まさかの運命的な出会いに、ミカンは胸が躍った。

必ず友達になってみせまっよ

ルリリは、ミカンの不気味な笑みを優しく見守りながら、昼食の続きをした。

同じく昼休み中の1 A。

出席簿順ということで、ナオタは右の最前列に座って弁当を食べている。机に置かれた四角い銀色の弁当箱は、高校入学時に新調したもの。今日初めて使ったので、表面がピカピカと光っている。左の半分にゴハンとシヤケを細かく刻んだもの。右半分には、ミートボール、ゆで卵、ブロッコリー、ミニトマトと丸っこいものが勢揃いしている。この組み合わせは秋葉家の定番メニュー。本当は弁当初日なでもっと桜色のめでたいものを希望していたナオタだった。

もう昼休みが始まってから15分が経ち、ナオタはほとんど弁当を食べ終えている。一食品ごとに集中せずにバランス良く全食品を食べていくのがナオタスタイル。ナオタはまだクラスの中で誰ともそれといった会話をしておらず、この後どうしようか迷っていた。さっきから目の前をちよろちよろと通り過ぎるクラスメイトは、一体どこに行くのだろうか？ などと考えながら、特製ソースが満遍なくかかったミートボールを箸で掴み、落とさないように口に持っていく。

口に入りそうなミートボール。そのおかずに立ち止まる男が一人。教室の外に出ようとしていたところ、ふっとナオタの席の前で止まり、振り返った。

「なんや自分ミートボールやん」

関西弁。ここは神奈川県のはずなのに。

ナオタは口に運ぼうとしていた箸を一旦止め、やっぱり口の中にぱくつと入れた。

いきなりなんなんだあ、とちよつと焦りながらも、もぐもぐとして何か返そうとする。

「俺も今日、昼飯ミートボールやってん。やっぱ、弁当って言った

らミートボールやんなあ。うまいし、丸いし、食べやすいし」

腕組みをして、うんうんと一人で納得する関西弁のクラスメイト。短髪ヘアで活のいい顔をしている。というか雰囲気をしている。

「そうかなあ、僕はいつも食べるから飽きてきたよ」

気さくに打ち解けようと、ナオタは冗談っぽく言ってみた。とにかく初対面だし、ゲームでは大体、おどけた文句が主流だもんなあ、とか思いながら無難な策でいく。

「アカンて。そんなん言うたら」

頭にクエツションマークを浮かべ、ナオタは呆然とする。

関西弁は、そんなナオタに寄り、

「あのなあ、ほんまいきなりでこんなん言うのもあれやけどあなあ、
」

あれってなんだ？ とナオタは心の中で問うが、相手には聞こえていない。

「せっかく親が作ってくれてんから、もっと、こゝう感謝しないとあかんのちゃうん？」

いきなりの説教。ナオタはもちろんその話し方もお節介な内容もうつつとうしいなあと思ひ、

「…あ、あゝ」

ぼんやりと返事。

そんなナオタに関西弁は、ハーッと分かりやすく溜息を吐き、

「もう分からんねやったらええわ。俺、ジュース買わんといけへんし」

なんか、なんとなく一方的に会話が進められ、腑に落ちないナオタは、負けじと言い返してみる。

「そういう君はどうなの？ ちゃんと野菜食べてる？ (好き嫌人多そうな感じだけど)」

「当たり前やん。なんでも食べるで。にんじんもセロリも食べれる」

びしっと、ナオタの弁当の中のブロッコリーを指さし、

「その、ブロッコリーだってなあ」

何を豪語しているんだろつと、冷めるナオタは関西弁のノリにそろそろ疲れてきた。ここは適当に言い繕って、どっかに行ってもらおうと腹を決める。

「へえ、そうなんだあ」

煽おたてるような口調で。

「なんならこれあげるよ、ほら」

作り笑顔で、ブロッコリーを銀紙ごと前に差し出す。

関西弁は分かりやすく、にんまりとした顔になり、

「おう、んじゃ、もらっとくわ」

ブロッコリーを掴み、ぱくつと食べる。

んっ、と一瞬、関西弁の表情が止まったように見えたが、すぐにつこりと笑顔で

「ありがとな。おおきに」

「ああ」

たったと教室の外に出て行った。

その姿が消え、自分があげたのに、立ちながら食べるなんて行儀悪いなあ、と一人感じながら、ナオタは残りの昼飯に箸を運ぶ。

関西弁は、ジュースを買うと言っていた。確かさっきの時間、先生が施設紹介を手短にしてくれた時に、自動販売機がどうだ、とか言っていたような気がする。

弁当の蓋を閉じ、ふるしきで包み、ナオタは次の行動を決めた。

まだ場所も分かんないし、行くだけ行くかあ

席を立ち、ナオタは自動販売機に向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804w/>

夢源転送 ~ phansifr transfer ~ ファンシフル トランスファー

2011年10月25日02時12分発行